第七章　撒兵隊

「房総半島」と聞いて、歯磨き粉のことを思い浮かべた。満年齢二十六歳の江原素六は、陸軍総裁勝海舟を前にして、たった今、撒兵頭(大佐相当の階級)の辞令を受けたばかりである。

この時代、江戸っ子の歯は清潔だった。誰もが歯磨きを習慣にしていたからである。当時の歯ブラシは房楊枝と呼ばれ、ヤナギやクロモジの棒切れを煮て柔らかくし、先端を木槌で叩いてブラシ状にしていた。これが町の小間物屋で売られている。ブラシの部分は木の繊維で柔らかく、反対側の尖っている部分が歯間ブラシとなっており、さらには柄で舌苔の除去までできるようになっていた。このよくできた歯ブラシを、江戸の人々は使い捨てにしたという。それが「粋」とされていたからである。必然的に需要の高い商品となっていたから、房楊枝造りは貧しい旗本の絶好の内職となっていた。江原素六も幼い頃から、ずっと房楊枝を作って暮らして来たのだった。

江戸の男のお洒落といえば、まず何をおいても「白い歯」であった。歯が汚れて口臭があると遊女に嫌われたからである。江戸の人口の七割は男であり、それは参勤交代に従って地方から侍が大挙して来るからで、吉原のような遊郭が繁盛した理由もここにある。男たちにとって白い歯を保つための歯磨剤は必須アイテムとなっており、このニーズにもっとも応えたのが千葉県館山の海浜の砂だった。粒がパウダー状で、これに香料を加えたものが歯磨き粉として売られていたのである。素六が房楊枝を小間物屋に卸しに行くと、いつもそこに「房州砂」があったものだ。

撒兵隊という部隊は、どうやら歯磨き粉の産地と関わりがあるらしい。素六は漠然とそう思った。

「福田の八っつあんは、部隊を房総半島へ動かす」

勝はそう断言する。

現在、水面下で新政府側と江戸城明け渡しの交渉が進められている最中である。勝は、

平和裏に幕府の牙城を明け渡すのと引き換えに、徳川慶喜の助命、一大名としての存続を要求している。大奥には前将軍の御台所である皇女和宮と、先々代の御台所である天璋院篤姫が居る。この二人は朝廷と薩摩藩にとって最大級の縁者であり、和宮は先帝孝明天皇の妹、天璋院は前薩摩藩主の養女である。勝は表立ってはいないものの、二人の存在を人質としてほのめかせつつ、できるだけ徳川家に有利な講和条件を引き出そうとしていた。

撤兵隊の動向も、その思惑の内にある。

「こっちの手駒は軍艦十二艘だ。こいつが江戸湾にあるかぎり、先鋒総督府もへたに戦争をしかけてこれねえ。福田の八っつあんは撤兵隊を率いて房総半島を占拠するつもりだから、そうなると精鋭の歩兵部隊も江戸の喉元にいるってえことになる。どうだい、断然我が方に有利な陣形だろう」と勝はほくそ笑むのだった。

「この形勢をもって、官軍と交渉を進めていく。おまえさん方には、福田の八っつあんが早まって軽挙に出ねえよう、とくと見張っててもらいてえのさ。撤兵隊は戦わずともよろしい。ただ房総にあって、官軍の脅威であればいい。下手に動いて官軍包囲網が崩れちまったら元も子もなくなるからよ。しかしこれあなかなか至難の業だ。なんせ血気盛んな連中だからな」

素六と共にここへ呼ばれ、同じく撤兵頭並(中佐相当)に任命されたばかりの増田直八郎は、大柄な体を乗り出すように膝をにじらせた。

「撤兵隊と砲兵隊は一蓮托生です。そうなると三千人近い大軍団になるわけじゃから、それがしと江原殿だけで抑えられるとは到底思えませぬ。ここへ福田様を呼んで、直に言い聞かせるべきではありませぬか」

との言い分はもっともであろう。

が、勝はふふんと鼻で笑うばかりである。

「おまえさんらも存じておるように、今の撤兵隊幹部らは、前総裁(小栗忠順)の息がかかった連中だ。和睦に動いているおいらの命なんざあ聞く耳持たねえさ」

「しかしですね」と、ようやく素六が話に入って来た。

「拙者にしても、増田殿にしても、我らは出が貧しいですから、高禄の幹部で占められている撒兵隊の抑止力になれと申されても、どだい無理があります」

それを聞いて勝は、爽快な笑い声をあげた。

「てやんでい、おいらだって極貧の出さ。そいつが今、幕府の最高峰にいるんだぜ」

勝は四十俵扶持の出、素六も増田も同じような境遇である。最底辺から這い上がるために苦学してきたという境遇は同じであり、両名とも勝が砲術科師範を勤めていた当時の優秀な生徒なのである。

武士道と云うは死ぬこととみつけたりというが、幕末に貧困層から出て来た幕臣は新たな価値観に目覚めつつあって、生死をそれほど単純に割り切っていないところがある。そんな漠然とした傾向を根拠に、勝は素六らを呼び出した。撒兵隊の中枢に二人を送り込むことで、福田八郎右衛門の暴発を抑制できると期待してのことだ。

この場にもう一人、精悍な顔立ちをした侍が同席している。貧しい蔵米取りとは月とすっぽん、直参阿部家三千石の当主で、邦之助という。素六より年長の二十九歳であり、少壮気鋭の若手官僚でもある。この人については素六も以前から知っている。大身でありながら封建的な慣習を嫌い、俸禄や身分によって人を扱わないことで有名な人であった。弊政を一新するには広く公議輿論をとるべしと将軍に建白書まで提出したことがある。素六も以前、陸軍士官の養成について意見を求められたことがあった。確かあのとき、旧弊を一洗するためには学校の設立が不可欠、という話で盛り上がったと記憶している。

勝は冷めた茶をぐっと一息で飲み干した。

「阿部さんの知行地が上総の大原(いすみ市)でね、そんな地縁もあって、このたび〈総房三州鎮静方〉に就いてもらった。撒兵隊の取り扱いについてもたいそう面白れえお考えの持ち主だから、おまえさん方もとくと拝聴させてもらいな。そいじゃあ済まねえが、おいらは他の用事が山積みなんで、後は阿部さんにまかせたぜ」とまくしたてて出て行ってしまった。

まさしく勝は、多忙を極めている。江戸城の攻撃へ向かう征討軍は駿府(静岡市)まで

迫っている。この戦いを回避できるかどうかに、江戸百万士民の命運がかかっているのである。慶喜は上野寛永寺の塔頭大寺院に入り蟄居謹慎しているが、護衛をもって任ずる幕臣らが〈彰義隊〉と称する徒党を組んで武装していた。すでに戦争の火種はあちこちでくすぶっている。

阿部はおでこが広く、涼しい目つきをしており、べらんめえ口調の勝と比べれば、商家の若旦那のような雰囲気を醸し出していた。あまり表情を変えない。

「さっそくですが」と背筋の通った姿勢を崩さないまま話し始める。

「それがしは日本国の未来を、このように考えております。三百諸藩の財政はどこも火の車でござるから、やがては債務整理と統廃合が促され、いくつかの大規模な藩に再編成されるでしょう。そこで新たに形成される雄藩は、ドイツ連邦における諸公国のようなものになるはずです。ドイツではすぐれた軍事力を持つプロシアが盟主となっておるが、我が国もそれにならうなら、最大軍事力を保有する徳川家が必然的に盟主となるでしょう」

阿部は遠くを見据えるように目を細め、ことばを続けた。

「勝さんの和平交渉が成功し、無事お家が存続となれば、徳川家は少なくとも百万石規模の藩となる。そうとなれば、その身代にふさわしい軍備を確保しておかねばなりませぬ。幕府海軍の最新軍艦四隻はもとより、撒兵隊と砲兵隊は手つかずで温存しておく必要があります」

それを聞いて増田が、しばし考え込むように首を傾げた。

「大鳥殿の伝習隊はどうなるのです。古屋作左衛門の衝鋒隊も、新選組だってまだ戦っております」

「傭兵は給金を目当てに動いていますから。そもそも戦う動機が全く違う。我ら直参は、主君の一命と、家名存続のために戦うのです。自ずから戦略が異なる」

増田が膝をにじらせた。「ならば阿部殿は、陪臣や傭兵は切り捨ててもよいとお考えか」

「背に腹は代えられぬ」

阿部はそっけなく答えて、話にじっと耳を傾けている素六の方へ目を向けた。

「江原殿にしても、増田殿にしても、大変な苦労をして西洋の軍事知識を学んで来られたはず。徳川幕府にとって、最後にして最大の武器が、これなのです。我々はこれまで日本政府の立場から、巨額の国費を使って使節や留学生を海外へ送り、最先端の学問と工業技術の輸入に努めてまいった。これら知的財産は金銀財宝にも比すべき価値があり、開明的な西南雄藩ですら未だこれほどの蓄積はござらぬ。我らは今後、この知的財産と引き換えに徳川家の新たな地位を築いてゆく。まずは西洋の軍事知識を教授する兵学校を設立し、撒兵隊及び砲兵隊の幹部らは、ここの教官となってもらう」

増田も素六もじっと阿部の話に聞き入っている。

「新政府にしても、欧米列強の侵略から国を守るべく、まずは何を置いても富国強兵を国策の第一に掲げるでしょう。その時、我らの知的財産に頼らざるを得なくなるのです。福田八郎右衛門は官軍と一戦交えるつもりでしょうが、そんなことをせずとも、我らは有利な立場に立てるし、すでに有利な立場におるともいえましょう」

と、阿部はほとんど表情を変えず、座を正したまま坦々と説いた。

陸軍所から撒兵隊幹部の制定軍装一具が支給された。

「持って帰るのも面倒ゆえ、さっそく着て帰りましょうか」と増田が言った。

新しい羅紗のマンテルは袖に階級を示す金筋が入っている。当時の軍服は学ランに似ていると前にも書いたが、幕兵幹部のマンテルは丈が膝まであり、腰から下に細かい襞が入ってスカートのようになっていた。その襞の上あたりに牛革製のベルトを付ける。金の側線入りズボン、革靴、ケピ帽、黒漆塗りのホルスターとスタール拳銃、弾薬盒、指揮鞭、吊剣ベルトとサーベル拵の刀などであった。

増田はズボンをはきながら、「えらいことになりましたなあ」とつぶやいた。「御馬先で死んで来いと命ぜられる方がまだマシだ」

素六は円筒形の平たい軍帽に髷が収まりづらいのを気にしている。

「ここまで徹底して洋式軍装をさせるなら、ちょんまげはやめなきゃならんじゃろう」

これを聞いて増田が声を上げて笑った。「江原殿はちょんまげの方が気になりますか」

「韮山笠であれば問題ないんじゃ。なれど、この形の被り物を正式に採用するなら、まずは髷の扱いを検討せねばならぬ」

と言いながら、苛立たしそうに何度も帽子を動かした。

「このサーベル拵にしたってそうじゃ。柄に護拳が付いておるゆえ両手で扱うことができぬ。されど我々は片手の操刀に慣れておらぬ」

素六が一方的にしゃべっている間に、増田は着替えを終えていた。

「この拳銃、連射できますよ。こいつがあれば西洋風のおかしな太刀なんぞ使わなくて済むやもしれませぬ」

空の銃を構えてカチカチ引金を引いてみせた。増田というこの大柄な若者には、どこか飄々とした楽観性がある。

しかもひどく嬉しそうに付け加えた。

「撒兵頭並の禄高は一千石。それがしのとこは傘張りの内職をしたり、拝領屋敷を町人に貸したりしてなんとか食いつないできたような家ですから、過日を思えば夢のような出世です。親が泣いて喜ぶ」

「それはうちも同じじゃ」素六もバックルを留めながら苦笑した。

素六の父、江原源五は四十一になるが、字が読めない。百姓でも字が読めたほど識字率の高いこの国で、武家の家長が文盲というのもめずらしい。この父には信念があり、「武士に学問は必要ない」と一貫して主張している。

江原家は三河以来の直参であり、代々〈黒鍬組〉を勤めてきた。城普請や道普請をするのが主な仕事で、戦闘には加わらない。近代の工兵隊のような存在だったといえば聞こえがいいが、身分は足軽よりも低かった。平和な時代ともなれば特に重要な仕事もなくなってしまい、江戸城まわりの雑用に従事していたというから中間や小者に近い存在である。

そうはいっても由緒正しき譜代筋目であったから、大工頭、畳奉行といった作事方の要職を勤めることもあり、六代目以降永々御目見え以上の旗本となっている。将軍に御目見えできるのが〈旗本〉、できない身分が〈御家人〉である。

江原家八代目の源五は無役の小普請組で、旗本ではあっても暮らしは貧しかった。妻のロク、長男素六、一つ下に長女の満寿、次男義次、三男銀蔵がいる。住居は拝領屋敷という官舎であったから家賃と地代はかからない。禄高は四十俵ほどであり、概算すると、この大家族が毎月七万円ほどの収入で暮らしていたことになる。長屋暮らしの三人家族が月収八万円程度で暮らしていける時代ではあったが、それにしても家計は火の車で、インフレも深刻であった。

源五は房楊枝作りを本分とし、家族総出で内職に励んだ。

「一文房は百本作っても六十文程度だが、櫂形だと同じ本数でも四百文ぐらいにはなる」

そんな昔話を始めた素六の元結を切った髪結職人は、心配そうにもう一度確認した。

「ほんに、髷を切っちまってもよろしいんですかい」

「ああ、ばっさりやっとくれ」

髪結床の板の間に並んで座った増田も振り向いて声をかけた。

「見ての通り、紅毛人の着物を着ておるから、ペリーみたいな頭にしてほしいのじゃ」

職人は困ったように首を傾げた。「ぺるりなんざあ見たこともねえから」

「品川辺りを闊歩してる西洋人を見たことござらぬか。斬髪にしておるであろう」

「そう申されても、とんと見当つきかねます」

「まあ、ざんばら頭ってのも落ち武者のようで恰好がつかぬから、いい塩梅に整えてくれぬか」などと、案外見た目にこだわりがある。

その点、素六は髪形などどうでもいいといった様子で話しを続けている。

「房楊枝を百本作ると、父上が四文くださる。この小遣いを墨筆代にして寺小屋へ通ったもんじゃ」と、ついこんな回想になるのも、撒兵頭となって石二千俵の高給取りになった感慨からだろうか。ちなみに一文は、現代の二十円ほど。

「父上は、武士が学問なんぞするとますます貧乏になると申されて、寺子屋でも読み書きしか習わせてくれんかった」

「え、それでよく昌平黌(東京大学の前身)の吟味を及第しましたね」

「他の子が素読しているのを聞いて、耳で覚えた。四書五経ひと通り」

「へええ。やっぱり主席はちがいますなあ」

四谷愛住町にある素六の実家は、ずいぶん前に火災で類焼し、以来仮設の掘立小屋である。壁は庭から掘り出した赤土を練って作り、六畳一間に二坪の土間があるきりである。この手狭な空間に家族がひしめいて暮らしている。便所小屋の入り口には筵が下げられていたが、往来の馬がこれを食べてしまったことがあり、三男坊の銀蔵が「大変じゃ、馬が便所を食っちまう」とびっくりして泣き出したこともあった。この時ばかりは仏頂面の父も大笑いしたものである。素六はそんなことを、ときどき思い出したりする。

今もぼんやり思い出の中に浸っていたのだが、増田が急に深刻そうなため息をついたので、我に返った。

「一刻も早く隊内に味方を作らんとなりませんな。勝総裁や阿部さんに同調する者どもを。江原殿、誰ぞ心当たりがありますか」

「さしあたり、砲兵頭の天野釣之丞さん辺りが開明的で総裁寄りだろう」

「砲兵隊を取り込めれば話が早いですな。撒兵隊の幹部の中にも、阿部さんの構想を支持する者は決して少なくありますまい」

二人の足元に、ばっさり切られた頭髪が山となっていた。

ざんぎり頭は洋装とよく似合う。けれども、見慣れない自分の髪形を鏡に映した二人は、えも言われぬ表情となり、しばらく頭を撫で付けていた。

完全洋装した素六の姿を見て、源五は露骨に顔をしかめた。

「なんじゃ、その百姓のような格好は」と吐き捨てるように言ったのは、ズボンが股引にでも見えたからだろう。間口の狭い四谷の家は日中でも薄暗く、木の削り屑が筵の上に散

らばっている。家族は小刀を片手にタスキがけをして、欅の切り株を作業台にしていた。作りたての房楊枝が山と積まれている。

百姓のような格好、と源五は見下したように言うが、クロモジの原木の匂いがする江原家も、とても武士の家とは思えない。

素六はサーベル拵の刀を脇へ置いて、源五の前に膝を付いた。

「父上、拙者この度、撒兵頭の任、仰せつけられました」

すると、早くも任官の噂を耳にしたものか、伯父の小野鼎之助が慌ただしく板戸を開け払って土間へ入って来た。

「素六、そなたあっぱれぞ、大栄達ではないか」

素六は控えめに頭を下げた。内心では、小野の伯父が褒めてくれることで、撒兵頭という階級のすごさを父に理解してもらえたら、と思っている。

末の銀蔵が目を輝かせた。「兄上、知行取りになったのですか」

「いや、そこまでの昇進ではない。されど、年俸は二千両じゃ」とさすがにここのところは声の調子も誇らしげで、母と満寿の方をかえりみる。「給料は月割りで届けられます」

二人とも声こそ上げなかったが、ぽかんと口を開けたまま、互いの顔を見やった。

「源五、今度ばかりは、褒めてやれ」小野の伯父が語気を強めた。

表情一つ変えずに、源五は小刀についたクロモジの灰汁を手拭いで拭き取っている。しばし黙り込んだまま、再び削り込みを始めた。

「おいおい、何か言ったらどうだ」さすがに小野の伯父も呆れた様子で眉をしかめた。

「公方様が政事を天子様にお返ししたそうじゃないか」と源五は低い声で言った。「いか者(御家人)などは、明日をも知れぬと騒いでおる」

確かに、源五の言う通りであった。徳川幕府の今後の行方は、この時点では誰にもわかっていない。

「のう源五、身も蓋もないことを申すな。ともかく今は、素六の出世を喜んでやれ」

「我が江原家は、三河以来の筋目。嫡男は、ただこの家を守るために生きねばならぬ。も

し幕府が禄を払えなくなったらいかがいたす。家族そろって飢え死にするか。だからわしは蘭学なぞではなく、喰いっぱぐれのない植木職を習えと勧めたのじゃ」

源五は徹頭徹尾、素六が学問をすることに反対してきた。

これまでに何人もの大人が、素六の利発さに気が付き、学業の援助を申し出たものだった。そのたびに源五が激怒し、突っぱねてきた。学問などというものは俳諧のごとき道楽に過ぎず、下級の幕臣が手を出せばたちまち家を傾けると決めつけていた。しかしそれでも教養ある人士らが陰に日向に援助を惜しまず、素六も父に隠れて苦学を続け、十五歳で難関昌平黌の試験に合格し、丹後縞二反を拝領する栄誉を賜ったのである。その後はオランダ語を習得、洋式兵学と砲術を学び、幕府陸軍の青年将校として一目置かれる存在となっている。

軍の給料はほとんど仕送りにまわしていたが、それでも実家の生活が楽にならなかったのは寄宿舎にいる弟義次の生活費もかさんでいたからである。けれども今度の昇進で、いよいよ人並みの暮らしができるに相違ない。

母と満寿は袖を目頭に押し当てていたが、源五は憮然としたままクロモジの木片を削り続けている。

素六は財布からいくらか取り出して満寿に渡した。

「これで人数分のゆで卵を買っておいで」

源五は木片の先端を睨み据えながら、

「贅沢するでない」と小声で叱った。

明王丸の地曳新一郎以下乗り子たちは、いつもの印半纏ではなく、藍で染められた義勇隊の羽織を着ている。脇差を落差しにして、白い鉢巻きを締めていた。

「まて様のおなありい」と一人が声をあげた。今回の出帆は商売ではなく、義勇隊の任務である。

艀の前に立った万里小路局に、林忠崇が心配そうに声をかけた。

「陸路でなくてよろしいのですか。船は揺れますゆえ、海路はなかなか苦しゅうございますぞ」

「船というものに乗ってみたいのじゃ」と、まて様は気丈である。「お殿様の方こそ、お乗りにならぬともよろしいのか」

「予は海伝いに街道をゆきます。地勢を見ておきたいのです」

「そは、戦を意識してのことか」

忠崇は静かにうなずいてみせた。

京の新政府は、全国の諸藩に『勤王証書』を提出せよと命じている。朝命を尊奉し勤王に励むと誓紙をしたため、藩の代表を上洛させよと号令をかけていた。朝廷と幕府のどちらにつくか、速やかに旗幟を明らかにすべしと迫ったわけである。

表向き請西藩は、家老の鵜殿伝右衛門と田中兵左衛門を京へ向かわせた。が、あくまでも時間稼ぎの為であり、忠崇自身は戦う他なしと思っている。

まて様の後に続き、旅装束姿の若い侍女たちが杖をつきながら、怖々と乗船してゆく。

都山が新一郎に向かって、

「船酔いなどさせたら、ただではすみませぬぞ。よくよくお気を使いなされよ」などと無茶なことを命じた。

「船に乗ったらおっけどん(船頭)まかせと申しましてね、海の上ではこのおれが、いちばんエライのです」新一郎はからかうように答えて、おぼつかない足取りで艀を渡る都山の手を取った。

風を受けて本帆がはち切れんばかりに膨らんでいる。乗り子が錨を上げると、明王丸は河岸を蹴るように海へ向かって動き出した。

忠崇は馬上から、鞭を握った手を高く掲げて見送った。

老席の木村隼人、供まわりの小幡輪右衛門、小倉左門を連れ、馬を駆って湾岸沿いを陸路で請西へ向かうのである。浅春の風はまだ肌寒く、明王丸の船影はしばらくの間、流れる雲とともに忠崇たちの視界の内を並走していた。

時代は激流のごとく変転している。若い世代は時勢を敏感に受け止め、己の進路に悩んでいる。しかし、島屋の一室だけはめったに襖も開かれず、相変わらず書物に埋もれた朝三郎が寝転んでいた。

最近のお気に入りは『解体新書』で、銅版画による人体図版に夢中であった。蘭学者によれば、殿様でも庶民でも、体の中身は皆同じであるという。胃だの腸だの、魚のはらわたとそっくりだ。「女子殖具全形」の図が気になって見入ってしまうが、この奇妙なものが女の股のどのあたりにあるのか、まるで見当もつかない。輸尿管と男子精道の構造的な違いもよくわからず、自分の股を開いて睾丸などをいじっていると、

「朝、入ってもいいか」

襖の向こうで幸左衛門の声がしたから、八端掛の小袖の裾を慌てて掻き合わせて、「はあどうぞ」などと妙に取り澄ましたような声で応えた。

幸左衛門も朝三郎の部屋に入るのは久方ぶりで、なんとなくよそよそしい仕草で部屋の中を眺めたりしつつ、本が散らばっていないところを探して端座した。朝三郎も、なんとなく気まずい気分で座り直した。

「本日、大奥の万里小路様が木更津に参られる。知っておるな」

町中この話題で持ち切りである。しかし朝三郎は知らなかった。まさか知らぬなどとは夢にも思わず、幸左衛門は話を続ける。

「長楽寺を仮の宿とされて、余生をここでお過ごしになるそうだが、まて様が、はやあこちらの暮らしに慣れることができるよう、神徳講が積極的にお世話をしてゆこうという話になっておる」

朝三郎は散らばった本を積み重ねながら、ぼんやりと話に耳を傾けていた。

「明日、島屋を代表してご挨拶に伺う予定なのだが、朝三郎、わしに代わって行ってきなさい」

えっ。と言葉も出なかった。

「いやいやいやいや」と尻込みしつつ首を振った。

「朝三郎、おまえが人と接するのを嫌がる気持ちはよくわかる。しかし、島屋の跡取りはおまえなのだ。一郎は跡取りについて、三千太郎とも常盤之助とも遺言しておらぬ。自分の後を継ぐのは、朝三郎、おまえと決めておったに相違ない」

なんと迷惑な話だろう。朝三郎は激しく動揺しているせいか、なぜか山東京伝の『芋地獄』に出てくる大タコ大王の姿がやたらと脳裏にちらついた。はっきり断ることもできず、「いやあ」と首を傾げているうちに幸左衛門は立ち上がり、

「それじゃあ明日、頼んだぞ」と少しばかり威圧的に微笑んだ。

朝三郎は「いやいや……」と何度も首を傾げて、深いため息をついた。

川名家の家紋を打った黒漆塗りの駕籠が、屈強な人足に担がれて湊にやって来た。降りるなり里鹿は伸び上がって、沖の方を眺めた。

「総三郎さん、どの船ですか？」

「あれですな」

と指差す向こうに、五大力船の大きな帆が見えている。出航してからちょうど二刻。新一郎の操船技術は一流である。

河岸場からは見えていないが、船端にのめって、都山が吐いていた。

「わたくしをこんなに苦しめる、海が憎い」と恨めし気な顔を上げて、また吐いた。

背中をさすってやりながら、新一郎が船首に向かって声をかけた。

「まて様、湊までは干潟を歩いて渡ります。おれがおぶりますんで、ご安心ください」

まて様は振り返ると、楽し気にうなずいてみせた。江戸を発ってからずっと弥帆柱につかまって進行方向を眺めている。侍女八人もそろって船酔いで横になっていたが、まて様だけは一向に疲れた様子もみせない。沿岸のあちこちを指差して、地名や湊の様子をたずねるのだった。足腰もいまだしっかりしており、視力も衰えていない。その証拠に、木更津湊の石堤に立つ里鹿の小さな姿を見つけて袖を振ったのである。

「あれあ誰すか？」

「椿。川名里鹿じゃ、そなたも存じておろう」

「こんなに遠くから、よくわかりますなあ」

「当然じゃ。わたくしにはわかる」

宿下がりをして庶民に戻って以来、里鹿は派手な着物を着ないように心がけている。しかし、まて様と再会するにあたって、心得違いとならない範囲で精一杯身なりを整えてきた。髪は片はずしにして揚げ帽子を被り、枝梅を包んだ花熨斗文様の着物、しごき帯でおはしょりを作り、白足袋に重ね草履を履いている。総三郎はこの装いを見て、まるで天女ではないかと思った。俗人が触れてはならぬほど、高潔な女性に見えるのである。

まて様が袖を振っているのに気付いた里鹿は、こぼれるような笑みを浮かべて袖を振り返した。

明王丸から放り投げるように縄梯子が降ろされる。

まて様も侍女たちも浴衣を上っ張りとして羽織り、足には脚絆、足袋に紐付き草履を履いている。とはいえ、縄梯子を伝って下へ降りるなど人生初の試みであろう。都山も侍女らも船酔いの末に忍者のようなことまでさせられて、顔面蒼白、涙目になっている。ただ一人まて様だけが臆することなく最初に干潟へ降り立った。新一郎に背負われたまて様は、湊に集まった人々の歓呼の声に迎えられ、威風堂々雁木を上がってきた。乗り子に背負われた都山と侍女たちは、力尽きたように両足をだらんと垂らし、髪もすっかり乱れていた。

江戸近郊で暮らす女たちにとって「大奥」という場所は憧れの的である。小さい頃から様々な習い事をして、将来は奥女中、と夢見る母娘も少なくなかった。数々世に出回っている『奥奉公出世双六』などは、御半下から御年寄へと出世していく江戸時代版のボードゲームであり、そんなものが女の子の人気を博したほどなのだ。湊にもまて様や侍女たちの姿を一目見ようと黒山の人だかりができており、あちこちで黄色い歓声が上がった。なかでも注目されるのは奥独特の髪形や化粧で、まて様のお長下げや殿上眉、侍女たちの稚

児髷などを遠目に見て、若い娘たちは熱い吐息をもらすのだった。

まて様を負ぶった新一郎を見て、すまは鼻高々だった。これからしばらくは奥女中の装いのことしか考えられそうにない。

新一郎が慎重にかがみ込むと、里鹿がそばに寄ってまて様の手を取った。

「椿、息災であったか」

その懐かしい声を聞いて、里鹿はこみ上げてくる感涙を抑えることができなかった。

「ご遠路はるばる……」といいさして涙を拭った。

都山は崩れるように長持に腰を掛けると、

「江戸前を渡りおおせて、まずは祝着」と息も絶え絶えである。

まて様は里鹿の手に己の手を重ね、しばしその手を離さなかった。

金蒔絵の装飾が施された女乗物が人数分用意され、熨斗目麻上下姿の請西藩士が数十名控えていた。陣屋の御殿女中らも着飾って出迎え、駕籠かきも羽織を着用している。栗毛の騎馬を先頭に美々しき行列を組んだ。里鹿の駕籠と総三郎もこれに連なる。正午の空は折よく晴天、沿道は桜の名所として有名な清龍山明王院長楽寺まで、やんやと賑わう見物人で埋め尽くされていた。

風向きのせいか、暮六つの鐘がいつもより大きく聞こえる。

薄暗い染め場の奥で縫之進が茶漬けを食べていると、藍甕をのぞき込みながらおぼつかない足取りで朝三郎がやって来た。

「あれ朝兄ィ、めずらしい」

「よく、こんなところで、飯が食えるな」

「これ一口食べてごらんよ。江戸の版元が土産にくれたんだけどね、あの有名な八百善のはりはり漬だよ」と箸で取って突き出したが、朝三郎は憮然とした面持ちであった。

「なにが、はりはり漬だ。おまえは、いくつになっても呑気で、うらやましいや」

「どうしたんだい。何かあった？」

朝三郎はしばらく何もこたえず、目を伏せたまま大きなため息をついた。
「明日、大奥女中のとこへ、挨拶に行かされる」
「ああ、まて様のとこ」
と言ってすぐ、縫之進は朝三郎の心中を察した。火傷の痕を、
「見られたくないんだ？」
朝三郎は黙ってうなずいた。
すぐに縫之進は自分の部屋へ行き、着物を一式持って戻って来た。
「朝兄ィ、ふんどし一丁になって」
人前で裸になるのを極度に嫌がる朝三郎であったが、今は言われるがままに小袖を脱いだ。
縫之進は御納戸茶の小袖を朝三郎のきゃしゃな肩に羽織らせると、朱の派手めな腹切帯を締め、「春だから、少し暑いかもしれないけど」とことわりつつ、腕と手が隠れるように黒の長羽織を着せてみる。
床に頭巾を二種類並べて、しばし縫之進は考え込んだ。
「たぶん朝兄ィは、顔全体が隠れる宗十郎頭巾がいいと思うかもしれないが……」とつぶやいて、もう一方の袖頭巾を取り上げる。
「こっちの頭巾だと、顔全体は隠せない。だけどね朝兄ィ、朝兄ィはまつ毛が長くて目が奇麗だし、鼻だってとってもいいかたちをしている。むしろ頭巾なんぞ被らなくていいんじゃねえかと、おれは思うんだ」
「おまえに、おれの気持ちが、わかるか。そっちでいいよ。宗十郎頭巾じゃ、さすがに暑苦しいだろう」
黒縮緬の袖頭巾で頭を包んでみる。朝三郎は吸わないが、帯にお洒落な煙草入れを着け、脇差を落差しにする。
「どうだい朝兄ィ、通人って感じの粋な装いだろう？」
鏡を見せると、朝三郎はくっと鼻で笑ったが、不服らしいことは言わなかった。

「これ、あす、借りてくぜ」
と高飛車に言い放って、小鉢のはりはり漬をつまんで口に入れた。

長楽寺は代々徳川家の篤い信仰をうけている。境内は三千坪、老松が枝を張り、桜の花びらで埋め尽くされた池の中で、緋鯉が悠々と泳いでいる。住職の海明和上の案内で、神徳講の世話役たちは本堂脇の離れ座敷に通された。一夜明けてまて様たちも一息つかれたようであり、都山などはしゃんと背筋を立てて上段から皆を見回している。

まずは里鹿が御挨拶を申し述べると、続いて仁呑喜平次が神徳講結成に至る動機、趣意などを説明する。一同忠勤に励み、これよりまて様を盛り立ててゆく旨を述べ、平に伏した。

「さすがは天領、さすがは林家の拝領地、民の志、まことあっぱれである」

まて様は感じ入ったようにうなずいてみせた。

里鹿は傍らの総三郎をかえりみて、にこりと微笑んだ。

「我が講の筆頭発起人は、こちらにおられる大河内総三郎殿にござります。総州一の剣の名人にて、子弟有志に武芸を習わし、義勇隊なる民兵を組織し、日々身を挺して近郷の治安維持に努めておられます」

総三郎は半身を少しばかり起こして、

「まて様におかれましては、ご機嫌うるわしゅう、祝着に存じ上げます」と声を張り、あらためて平伏した。

その太い声がいかにも剣豪然としており、時勢が幕府側に極めて不利なこの時期だけに、まて様はひどく頼もしい味方を得た気がして心強かった。それだけに、総三郎の傍らで平伏している頭巾を被った小男の存在が、いかにも浮いて見える。

「そのほう」と、まて様は朝三郎に声をかけた。「この暖かな春の日中に、なぜ頭巾なぞ被っておいでじゃ」

都山もキンとした声を上げた。「まて様の御前で失礼ではありませぬか。頭巾をおとり

なされい」

朝三郎は身を固くして縮こまった。

顔を伏せたまま、総三郎が小声で言った。

「朝、臆するな。堂々と頭巾をとるがいい」

ややあって朝三郎は顔を上げると、たどたどしい手つきで頭巾をとった。

火傷で崩れた面相を見て、都山と侍女らはあっと息を飲んだ。

まて様は目を細めてじっと朝三郎の顔に見入った。

「そのほう、近う進まれよ」

朝三郎は体が委縮して動けない。

「近う」

平に顔を伏せたまま、這うように膝行して敷居際まで進んだ。

「面を上げよ」

少し体を起こした朝三郎のあごに、まて様は扇子を当てると、ぐっと上を向かせた。

「これは、火傷の痕か」

まて様の視線を避けるように朝三郎は目をそらした。

「そなた、大谷刑部公を存じておるか」

存じるもなにも、朝三郎の最大の趣味は武将の絵姿を収集することなのである。が、答えたくとも声が出なかったから、知らないと思われたのだろう。

「かの武将は、東照宮公を除こうとする石田三成の謀に反対し、軽挙を諫めたが聞き入れられず、友情と義を主んずるあまり関ヶ原へ参戦なされ、みごと討ち死された。そのとき刑部公は重い業病におかされており、馬にも乗れぬゆえ輿に乗り、崩れた面相を隠すため、頭巾を被っておられたという」

大谷刑部吉継は朝三郎が最も敬愛する武将の一人だ。『関原軍記大成』は愛読書であり、その中に書かれている「吉継は甲冑をばよろはず、浅葱の絹の袋に顔さしいれて、四方取放したる乗物に乗って云々」という描写が印象的で、諳んじることができるほどこの

分を読んだものである。

ゆっくりと視線を上に向けると、まて様と目が合った。

「そなた、名をなんと申す」

「木更津紺屋……、島屋一郎が嫡子、大河内、朝三郎……、と申しま、す」

「朝三郎、そなたはその面相を人に見られたくなかったのであろう。にもかかわらず、頭巾を被ってまで馳せ参じた。大谷刑部がごとき義士ではないか」

まて様は扇子を持ち直し、威儀を正した。

「鳥羽伏見の敗戦以来、譜代大名はおろか御親藩まで薩長賊の傘下に下り、神君以来の恩顧を忘れ、かくも腰抜け武士ばかりかと唇をかむ思いであった。なれど上総へ参り、真の味方は民の中にもおることを知った。そなたらは忠義の士ぞ。栄えある徳川の世を、ともに守ってまいろう」

朝三郎は畳に顔を伏せたまま、生れて初めて感じる名状しがたい感情で体の震えが止まらず、ぽたぽた涙が止まらなかった。

家臣三人と共に房総往還を下って来た林忠崇は、この街道が戦場になるだろうと予感している。自分がおめおめと薩長賊の軍門に下ることはなかろうし、そうであれば戦は避けられない。となると、江戸方面から攻めて来る敵と、それを迎え撃つ我が方が、この街道上のどこかで衝突することになるのは間違いない。房総往還は船橋大神宮下が起点で、そこで成田街道から分岐している。稲毛の浜を過ぎ、千葉の町へ出て、一行は昨夜、蘇我で一泊した。路はずっと江戸湾岸に沿っており、江戸前の制海権は幕府海軍が掌握している。忠崇は牝馬の背に揺られながら家臣たちの方へ振り返った。

「幕艦が沖合にある限り、敵が房総半島を占拠するのは不可能であろう」

「でしょうなあ。街道筋はどこも艦砲の射程内ですからな」と傍らの小倉左門が答えた。

幕府軍は京阪でこそ敗れたが、ここ関東で負けることは、まずないように思われる。ペリーが来航した時、当時の幕閣が震撼したのは、黒船の射程内に江戸城があったからだ。

これから江戸入りする東征軍も、あの時の幕府と同じ脅威にさらされることになるだろう。

一泊二日の道中でいくつもの川を渡った。江戸川、花見川、村田川、養老川。さらには姉ヶ崎一帯の急峻な丘陵も敵軍をはばむ大きな障壁となるだろう。木更津まであと一歩のところに小櫃川もある。川番所に到着した忠崇は広々とした川幅を眺めて、地勢的にも我が方が圧倒的に有利、との思いを深めていた。

対岸に侍がいる。

「諏訪殿ですよ」と小幡輪右衛門が目を凝らして手を振った。

人足に先導されて馬ごと川を渡る。川の水はまだ冷たく、水草が見えるほど澄んでいる。対岸の川辺に着くと数馬が忠崇の馬の口を取った。

「どうじゃ数馬、体のあんばいは」

「はい、おかげさまで快調です」と笑顔で答えながらも、時折から咳をしている。

下馬した忠崇は、心配そうに数馬の顔をのぞき込んだ。

「こんなところまで、迎えに来ずともよいものを」

「皆様、貝淵の下屋敷でお待ちです。殿、いかがでございますか、初めてのお国入りは」

「それよ。その思いを歌にしてみたところじゃ」

「しばしお待ちくだされ」と、数馬は懐から矢立と紙を取り出した。「書き留めておきたく存じます」

「そんな、たいそうな歌でもない」忠崇は照れ臭そうに笑った。

「初日かげ　はれたる富士にてりはえて
波さへたたぬ　木更津の海

この時期に初日影もおかしいが、初めての国入りであれば、それもまた良きかと」

数馬は書き留めた歌をしばし眺めて、自分も声に出して詠んでみた。

菅笠に手を添えた木村隼人は、その声に耳を傾けながら、西の空にくっきりと稜線を浮き上がらせている富士山を仰ぎ見て、

「まこと良い歌ですな」としゃがれた声で言った。

今、全国の藩主が、お家存亡にかかわる岐路に立たされている。家老の立場からしても未曾有の危機に直面していると木村は痛感している。なれど、家督を継いでまだ半年の我が殿は、若干二十一にして、なんと肝の据わった若武者であろう。

「波さへたたぬ木更津の海、とは、実に泰然自若たるものじゃ」

数馬たちも同感であった。

忠崇は、小櫃川の河口から広がる広大な干潟を眺めている。くちばしの黄色い海鳥が数羽、沖合の風に吹かれて鳴いていた。

「そうじゃ」と忠崇は振り返った。

「浅野作造に頼まれておったことがある。数馬、真武根陣屋に入る前に、四方ヶ原の牢屋敷へ案内してくれ」

三千太郎たちの釈放に関することだと察した数馬は、ようやくこの時が来たと胸をなでおろしたのであった。

楓江先生が魚を釣ってきた。ついでに浜チシャとクコの芽も摘んできたという。豊は楓江の釣り具を眺めて、

「もうすぐ江戸で戦が始まるって噂なのに、先生もずいぶん遊び好きだねえ。糸だってこれテグスでしょ。高いんでしょう」

「いてもたってもおられぬから釣りなぞしておるのだ。これを肴に一杯どうじゃ」

平右衛門はびくの中をのぞき込むと、並びの悪い歯をのぞかせてはしゃいだ。

「こいつあすげえ、アジ大漁じゃねえすか。なめろうと塩焼きにすべえ。浜チシャとクコはおひたしだな。そろそろ煮売屋にも飽きてきたところさ」

びくを片手にぶらぶらさせて、嬉々として獄舎の台所へ向かった。

房の奥で書物を読んでいた三千太郎が、突然腹を抱えて笑い出した。

「黄表紙って、ほんとおもしれえや。朝三郎兄さんがはまる気持ちがわかった気がする」

手にしている本の著者は山東京伝、題名は『一百三升芋地獄』

「大タコ天蓋大王とか、いもあみだぶつ、とかさあ」と本を閉じても笑いが止まらず、笑い過ぎて涙まで流している。

「あんたも平気の平左だね。戦争が始まるかもしれないんだよ」

しかしそんな三千太郎の姿を、楓江先生は肯定的な眼差しで眺めているのだった。

「剣一筋であったこの武骨者が、今では書を読む楽しさを知ったのじゃ。なかなかの進歩とはいえまいか」

言われてみればその通りで、豊の房にも貸本屋が持ってきた流行本が積まれている。恋文の手引書『女用文忍草』、メイク本『都風俗化粧伝』などなど。これを機に『女大学』なども借りてみたが、女子はしゅうとしゅうとめに仕るゝものなれば……、のくだりを読んだだけで胸糞悪くなった。

「楓江先生の影響で、あたしも本を読むのがすっかり好きになったよ。外国のことなんかもずいぶんわかってきたし」

と言いながら豊は一冊の本を手元に引き寄せた。

「でもさ、先生いち押しの、この本はいただけないよ。あたしらの住んでる土地が丸いとかさあ、西洋人の中にもべらぼうなのがいるんだねえ」

豊はそれを滑稽本かなにかだと思っている。『刻白爾天文図解(こっぺるてんもんずかい)』。原本の著者はコペルニクスである。

「なにを申すか、天文学はれっきとした学問ぞ」

「やだなあ先生、土地が丸かったら転がっちゃうでしょ」

などと言い合っているうちに、アジの焼ける匂いが漂ってきた。

「さあさあとれたてをいただこうぜ」

平左衛門が両手になめろうと塩焼きの皿を持ち、牢番に燗銅壺と酒器、おひたしの皿などを持たせて戻って来た。

「サンテ！」と楓江仕込みのフランス語で乾杯する。

日の沈まぬうちから熱燗をすすっていると、今度は司獄官が血相を変えて渡り廊下を駆けて来た。

「そなたら、酒なんぞ飲んでおる場合ではない！　そこに参られておるのじゃ。このようなところに、恐れ多くも、請西候が！」

と息せき切っているうちにも打裂羽織に裁付袴姿の若武者がズンズン廊下を渡って来る。

すでにほろ酔い気味の楓江が、さっと膝を正して平伏したあたり、ぬきがたく武家の作法が染みついているのだろう。つられるように三千太郎たちも頭を下げた。

忠崇は司獄官に向かって、

「この者らは大奥老女の荷を死守した義民である。直ちに釈放いたすように」と命じた。

ところが相手は、「いかに請西候の上意とは申せ」と食い下がる。

「この者らの処置は関東取締出役の管轄なれば、当方では対応できかねます」

それを聞いて忠崇は苦笑し、諭すように言った。

「公方様は大政を朝廷に返上されたのじゃ。もはや幕府に民を取り締まる権限はない」

司獄官は、あっけにとられたように目を丸くした。このやり取りを上目遣いにのぞき見ていた楓江は、ひょいと顔を振り上げて膝を打つ。

「さすがは英明の誉れ高き請西候。その通りです。八州廻りの御役目は、王政復古の大号令が発された昨年十二月九日の時点で終わっておったのです」

「はあ？」と思わず豊が声を上げて楓江を睨みつけた。

「じゃあなんであたしらは牢屋にずっといたのさ」

「幽囚、何ぞ恥ずべけんや。ここで書を読み、酒を飲み、共に語ろうて楽しかったではないか」

「先生はわかっていて、あたしらをだましてたんだ！」
「人聞きの悪いことを申すでない。わしとて確信が持てなかったのじゃ。王政が復古されても、幕府の役人は誰一人それを認めておらなんだ。いま初めて、しかるべきお方から言質を取ることが叶うたのじゃ」
「楓江先生」
と神妙な面持ちで忠崇が声をかけた。
「先生などとはもったいないおコトバ」慌てて板敷に平伏する。
「おうわさはかねがね家臣から聞き及んでおります。学識比類なき先生がこの地に閑居されておられるのも何かの縁、どうか撫民の術をご指導願いたい。多事多難の時勢であるからこそ、善政美法を施し、大いに兵威を振るいたい」
「誠ご立派なるお心がけ、それがし微力ながら、請西候の御ため、一死をもって尽力致します」
さらに忠崇は、傍の三千太郎に声をかけた。
「その方、諏訪数馬に鎖鎌を指導しておるそうじゃな」
生れて初めて諸侯に話しかけられた三千太郎は、さすがに胸が拍動した。少しばかり酒を飲んでおいてよかったとさえ思う。
「予は、刀槍二芸は宝蔵院流伊能一雲斎が子息矢柄に習い、弓は旗本坂本氏、馬術は西丸下に通学し、洋式砲術は藩士らと受教した。なれど武芸十八般のうち、もっとも興味深き鎖鎌術は習得の機会を未だ得られておらぬ。その方、予に指南してはくれまいか」
三千太郎は「はッ」と即答したものの、もとは農民の武器であったものを殿様が習いたいとは意外であった。よほどの物好きか、大の武芸好きなのであろう。
若さみなぎるというべきか、さっそくここでと羽織を脱いだから、数馬が慌てて諌めた。
「遠路のお疲れもありましょうから、また日を改めては」
「天下の大事、日に日に急であれば、習えるうちに少しでも習うておきたい」

牢番の控室に一通りの武具や捕物道具が揃っているから、獄吏に命じて鎖鎌を取りに行かせた。

忠崇は、鉄砲と鎖鎌の分銅ではどちらの方が飛び道具として有効か、などと、豊や平右衛門にも気軽に問いかけてくる。平右衛門は、鉄砲なんぞ弾が切れたら無用の長物と答えたが、豊の方は手裏剣やクナイの方が一撃必殺で私は好きです、などと答えになっていない。そんな話題に花を咲かせているときの忠崇の表情は朗らかで、およそ殿様らしくない快活さであった。楓江はそんな若き藩主を崇敬するように眺めつつ、手酌で酒をすすった。

袖をタスキ掛けにした忠崇は、まずは三千太郎の見事な鎖さばきに見入った後、中段の構えや、もっとも基本的な攻撃法である虎乱日月砕きなどを伝授された。

家老の木村隼人は雨戸の開け放たれた廊下に寄りかかってこっくりこっくり船を漕いでいたが、小幡輪右衛門と小倉左門は楓江に勧められるがまま熱燗をすすっている。酔いがまわるにつれて二人は、今後請西藩がすすむべき方向について語り出し、朝命に従い上京すべきか、徳川の雪冤を図るべきか、藩論をどのように定めたら良いかまるで見当もつかないと楓江にもらすのだった。やがて煮売屋から夕食が届くと、今度はそれを肴に飲み続けた。

熱心に稽古をしている二人を眺めながら平右衛門が、

「ここの煮しめを食うのも、これが最後だ」と上機嫌で盃を傾け、豊に小声で話しかけた。

「豊ちゃん、あのお殿様に惚れちゃうんじゃねえかい」

豊はしごくあっさり首を傾げる。

「確かに役者絵みたいに奇麗な顔立ちだね。だけどあんまり整い過ぎているよ」

息の上がってきた忠崇は、しばし鎌を持つ手を止めて、呼吸を整えつつ首筋の汗をぬぐった。そろそろ西の空が朱色に染まりつつあった。

「数馬から聞いたのだが、そなた、新妻を失ったばかりであるとな」

三千太郎も汗をぬぐいながら黙ってうなずいた。

「予も同じ時期に母を亡くし、昨年は父も失った。それ故、そなたの気持ちがよくわかる」

高い土塀の上に太陽がかかると、少しずつ敷地の隅が薄暗くなってゆく。

「なれど、我らの悲しみとはかかわりなく、当月十五日を期して江戸城へ侵撃の令ありと聞く。時事ここに至ったからには、もはや関東での戦は避けられまい。民を虐して家を全うする気など少しもないが、さりとて佐幕の赤心を遂げず、むなしく世間の笑いものになるわけにもゆかぬ。もし新政府の所業が天道に背き、公明正大とは申し難き挙動となれば、その時は大義の旗を掲げ、万民を安んずるために戦う覚悟である。三千太郎、そなたも予とともに戦うてくれぬか」

思い詰めたようにそう言うと、忠崇は視線を土塀の向こうの夕景に向けた。三千太郎も同じ方を仰ぎ見た。いつものごとく富士の山容は雄大で、今日は遥かに丹沢の山影まで見渡せる。三千太郎は、なをと太田山から眺めた夕焼けを思い浮かべていた。あれからもう二年が過ぎた。失うものなどなにもない。死地に赴くのも良いではないか。ふと、そんな気がした。

「戦うのはかまいません。ですが、木更津を戦火に巻き込むのだけはご容赦ください。この町はかつて、我が一族の失火で灰になり、町の人たちの努力によって、ようやく復興したばかりなのです。再び失うわけにはいきません」

「ようわかった。それは予も願うところじゃ」

忠崇は、まなじりを決っしてうなずいてみせた。

東征軍は三月十四日までに江戸城総攻撃の陣容を整える予定である。すでに西郷隆盛参謀の率いる東海道軍は品川に、板垣退助参謀の東山道軍本隊は板橋、その支隊は新宿にあって、翌十五日の夜明けを待って城下へ突入する手はずとなっていた。この時点では徳川慶喜の処刑まで俎上に上がっていたが、これについては英国公使から厳重注意を受けてい

る。すなわち、欧米の常識として降伏している相手に攻撃を加えることなどあり得ないというのである。もとより日本は武士道の国であるから、西郷などはこの点についてはすんなりと了解した。が、建前として厳しい姿勢はゆるめない方針である。そこへ幕府を代表して勝海舟が会談を求めてきた。

勝もまた悲壮な覚悟をかためてこの会談に挑もうとしている。もし和平交渉が決裂したなら、その時は自らの手の者で江戸市中に火を放ち、焦土戦を展開する手はずまで整えていたのだ。それだけの戦意をみなぎらせて挑まねばならない交渉なのである。降伏するにしても慶喜本人が単騎軍門へおもむくような事態は絶対に避けたかったし、もし助命がかなっても外様藩に身柄を預けられるような恥辱を受けるわけにもいかない。一大名に降格されるにしても、加賀百万石を越える規模の藩でなければ徳川の社稷を存続できたとは言い難い。ようするに、徳川家のしかるべき身代と威勢を保持したまま降伏したいのであり、勝の智謀はその落としどころを見据えてフル回転している。

三月十四日、勝は馬丁一人を従えて芝田町の薩摩藩邸へ向かった。

新政府を代表してこれを迎えたのは東征軍参謀西郷隆盛であり、勝とは四年前に政談を交わしたこともあって、旧知の仲であった。西郷は勝の見識の高さを尊敬していたし、勝の方も、赤心を人の胸中におくような西郷の人格を敬服していた。しかも二人とも明晰な頭脳の持ち主で、同胞相争えば列強に侵略の口実を与えかねないという危惧を抱いてもいる。願わくば首府を戦火に巻き込まず、平和裏に江戸城を開城したいという思いは、双方口に出さずとはいえ一致しており、それゆえ慶喜の死一等を減じ、実家の水戸家へ蟄居させる、というあたりまでの取り決めは、すんなりと交渉が進んだ。難航したのは兵器弾薬と軍艦の引渡しについてであった。

「この件に関しては」と勝の表情は険しい。「降伏する以上、武器を引き渡すのは当然でありましょう。なれど、旗本八万騎のみならず、下民取り立ての兵も膨大であり、この者らが携行する武器を回収するには時間も手間もかかるということをご理解願いたい。軍艦については管轄が異なり、実質的に艦隊の指揮を執っておるのは海軍副総裁の榎本武揚で

ござるが、現在は品川沖の艦上にいて連絡がつかず、率直に申し上げて統制がとれておりませぬ。かの者らは先将軍の処分如何をうかがっておるのでしょう。大総督府の出方次第では、江戸が焦土と化し、百万の生霊が損ぜらるる事態もあり得ます。願わくば寛大な御処置を賜りたく、当方も一命を投げうって鎮撫に努める所存です」

これは事実である。しかし、方便でもある。

陸兵も艦隊もすんなりとは降伏しないだろうとほのめかせることで、徳川に有利な講和条件を引き出したいのである。徳川家の存続が確定し、幕臣を養うに足る石高を獲得するまでが勝の正念場なのだ。

「勝先生、軍器軍艦ん引渡しがなかれば、恭順ん実が上がりもはん」とさすがに温厚な西郷も閉口した。

しかし、慶喜の水戸退去と江戸城の明け渡しまでは確約し、皇女和宮と天璋院の身柄も確保されたことで一応この日の談判は決着し、

「徳川三百年ん功績に免じっせぇ、明日ん江戸城総攻撃は中止いたしもんそ」

と西郷はうなずいてみせた。

これにより江戸は戦渦を免れ、都下百万の生霊が守られたのである。

江戸城の引渡しは四月十一日と決まり、西郷は新政府軍を府内に残し、交渉の結果を報告すべく京都へとって返した。この時、薩摩藩のお抱え力士であった横綱の陣幕久五郎が、自分の駕籠を西郷に提供している。西郷の体格も関取なみだったから、これはありがたいことであったろう。陣幕はこの後も薩摩藩と行動を共にし、やがて総州の戦にも従軍することになる。

総攻撃前日の戦闘中止命令は、士気が昂っていただけに板垣退助参謀らを激怒させた。一方で、江戸城内に戻った勝が閣老にそれを伝えると、「予がこの言を聞いて一歎の声あり」、水を打ったように静まり返っていた人々が一斉にほっと胸を撫でおろしたという。

ともかく差し迫った危機は回避できた。さすがに疲労した勝が着崩れた継上下を整え直し、城を出て赤羽橋に差しかかったところ、耳をつんざく銃声とともに弾丸が鋭く耳元を

かすめた。さらに一発、二発と撃たれたが、この男には強運も味方しているものか一発も当たらなかった。犯人とおぼしき者が遠くの方で、

「徳川累代の鴻恩を忘れた臆病武士め！」と怒鳴って去って行くのがかすかに見えた。

「動いておるものを撃つのは難しいと聞いておったが、なるほどその通りじゃな」

短銃の銃口からまだ薄っすらと硝煙が出ている。

松平金之助、官名を兵庫頭という。徳川連枝の後胤で、知行は捨扶持三百俵に過ぎないが、大名諸侯よりも上席に坐れる家格のひとである。奥詰銃隊差図役であるが、御大身ゆえかあまり調練に参加したことがなく、拳銃の射撃姿勢すらおぼつかない。常日頃、我れは銃卒にあらず、雌雄は太刀で決すべしと息巻いており、今まさに奥詰銃隊の屯所へ辞表を提出してきたばかりであった。たまたま下城する勝を目にとめて、好機到来とばかりに引金を引いたのである。松平姓の兵庫頭からすれば勝など末端の小臣に過ぎず、そんないか者が主導する江戸無血開城を受け入れる気など毛頭なかったのだ。

が、いかに徳川家御親類とはいえ現職の陸軍総裁に発砲するなどあまりにも無思慮であり、普段は温厚な浅野作造でさえこのときばかりは声を荒げた。

「兵庫殿、軽はずみな行動はお控えくだされ！」

「あの腰抜けに我らの怒りを表明したまでよ」などと、兵庫頭は悪びれる様子もない。

この男が独自に組織した有志隊を、

〈貫義隊〉

という。

直参の武術師範や武芸錬磨の士を集めた刀槍部隊である。銃隊化した幕府陸軍とは一線を画し、戦国時代さながらの戦法を理想としていた。副首領に安田幹雄、後に会津で新選組に加わる河合鉄五郎、広敷役人の浅野作造などが兵庫頭の厳命で入隊していた。脱銃隊を支持する同好の士も多く、隊士名簿にはすでに百五十人あまりが名を連ねている。

この部隊の目的は、江戸を脱して北関東へ転出し、会津藩兵と行動を共にすることであ

った。それゆえ兵庫頭は会藩公用方の広沢安任や、同藩士で上野の彰義隊と密に連絡を取り合っている武川信臣などと会合を重ねている。

この夜も、作造を伴い会津藩勤番長屋の二階へ上がった。

そこに佐幕派の同志が集まっている。撒兵隊の堀岩五郎や、すでに府内で名を知られつつある常盤之助や斎藤常次郎なども顔を見せていた。

薄明りに照らされた広沢安任の顔は、かなりやつれている。この時期、三百諸藩の中で、もっとも危機的状況にあったのは会津藩であろう。物音をひそめた室内に、広沢のため息がもれた。

「恐れ多くも我が殿が、京都守護職を拝命し、あしかけ六年にわたって禁裏を御守衛奉り、藩を挙げて京師の治安維持に努めたのは、藩祖の遺訓に従ったからなのです」

遺訓とは、初代会津藩主保科正之(後に松平へ改姓)が子孫に残した『家訓十五ヶ条』のことで、その第一条は次のようなものであった。

〈大君の儀、一心大切に忠勤を存すべく、列国の例を以て自ら処るべからず。若し二心を懐かば、則ち我が子孫に非ず、面々決して従うべからず。〉

会津藩と徳川幕府は一心同体である、この意向に背くような藩主は私の子孫ではない、家臣も従うな、と戒めている。

藩祖正之は、二代将軍徳川秀忠の庶子であり、三代将軍家光の異母弟であった。秀忠の正室が嫉妬深かったため、正之の存在は御落胤として長らく秘匿された。後に家光は、この日陰者の弟を重用し、会津二十三万石の藩主に取り立てたのである。その恩に報いるべく、正之はこのような家訓を残したのだ。

「この一条を持ち出して弊藩を京都守護職に就けたのは、先将軍と越前候(松平春嶽)であらせられる。当時殿は病臥しており、何度もこれを固辞した。なれど有無を言わせず重職を押し付け、過激な尊攘派の矢面に立たせたのだ。今日弊藩が長州から根深い恨みを買われておるのはこのためである。しかれども、当の越前候は旗色が悪くなるや早々に幕府を見限り、薩長の驥尾に付し、今や新政府の議定職に収まっておられる。公方様も謹慎さ

れるにあたって我が殿の江戸城登城を禁止され、あげくに府外へ立ち退けと命じてくる始末。越前候にしても、公方様にしても、これまで幕府が薩長と敵対してきた責任を、すべて我が殿と会津藩に擦り付けておるのだ」

広沢のこの悲痛な訴えは事実である。あきらかに先将軍も幕閣も、会津藩を人身御供にして生き残りを図っている。新政府軍も、江戸城総攻撃を中止したことで、矛先を会津本国へ転じるだろう。

その非を広沢は新政府に訴えている最中なのであった。

「もしこの訴えが叡聞に達することなく、あくまで薩長が我らを朝敵とするなら、そのときは最後の一兵となるまで戦い抜く覚悟でござる」

だが、会津藩に有利な状況も芽生えつつあった。貫義隊を率いる兵庫頭は、その展開に勝機を見出している。

「広沢殿、悲観めされるな。東北諸藩はいずれも会津に同情的じゃ。東日本で軍事同盟を結成し、西国の奸藩どもと天下分け目の大戦に挑もうではないか。賊どもが錦旗を掲げるなら、貫義隊は日光へ赴き、東照神君の御旗を押し出そう。腰の砕けた先将軍だの閣老などは見限り、権現様(徳川家康)を旗印とするのじゃ。さすれば諸侯も三百年来の重恩を思い出すであろう」

旗といえば、武川信臣に思い当たることがあった。

「上野の山に覚王院義観という大僧都がおられます。その方が申すに、日光山には一旒の錦の御旗が秘蔵されておるそうなのです。ご存じの通り、寛永寺の門主は代々宮方からお迎え奉るが、それは万一朝廷に逆心あらば、この宮をもって都の天子と換え奉るためでござる。すなわち現在の門主、輪王寺宮が掲げるべき旗印が、すでに日光の廟所にあるとのこと。家康公は、かかる事態の到来を想定しておられたのです」

「公算大なり」と作造が膝を打った。「貫義隊が東照宮に立て籠もり、北関東を抑える。撒兵ならびに義勇隊が房総半島に割拠し、榎本艦隊が江戸湾を封鎖する。あまつさえ上野には彰義隊も屯集しておる。もはや新政府軍は江戸府内から動くことかなわず、その間に

東北諸藩の軍事同盟が成れば、薩長賊を西国へ押し戻すことなど容易かろう」

この中で唯一、西洋式の軍服を着ている撒兵隊の堀岩五郎が、あらためて同志たちを見回し、確認した。

「彰義隊をのぞく各隊は、江戸城引渡しの期日までに府下を立ち退き、総野の各所へ脱走を図る。それでよろしいか」

皆、互いの顔を見合ってうなずき合った。

広沢は常盤之助の方へ膝を向けた。

「貴殿に、弊藩の細川外記と荒井直五郎を託してもかまいませぬか。房総方面の連絡役として、お頼み致したい」

「喜んでお引き受け致します。義勇隊の参謀に迎えましょう」

外記とはすでに親しいが、荒井直五郎とは初見であった。しかし浅からぬ地縁があるようで、この青年は生まれも育ちも富津なのである。木更津からもほど近い。

二十一年前、幕府の海防政策に従って、会津は江戸湾へ藩兵を派遣した。このとき割り振られた守備陣地が富津岬であったので、房総常詰役となった藩士たちは家族を連れてかの地に移り住んだのである。会津藩に上総を故郷とする藩士が少なからずいるのはこのためだった。荒井は内房の地理にもくわしく、ことばの抑揚もどこか総州弁を感じさせるところがあって親しみやすい。

兵馬悍強と一目置かれる会津藩から二人の藩士を参謀に迎えることができるなど、義勇隊にとっては願ったり叶ったりのことであった。が、それと引き換えたように斎藤常次郎が脱隊する。

兵庫頭は、常次郎が西小姓組斎藤久右衛門の息子で、直新陰流の門人と知ると、その場で貫義隊へ引き抜いてしまった。やんごとなき相手の命令とあれば逆らえず、常次郎はこれまで行動を共にしてきた常盤之助と突如別れるはめになった。せめてものなぐさめは、貫義隊の中に木更津と縁のある浅野作造がいることぐらいだろう。

常盤之助は声を励まして言った。

「常次郎は北から、おれは南から、薩長賊を挟み撃ちにしてやろう。やつらを誅伐したとき、再会できるぜ」

常次郎も鼻の奥がツンと痛むのをこらえながら、

「どちらの方が多く賊兵の首をあげるか、勝負ですよ」

などと強がって、にっこり笑ってみせた。

江戸城西之丸下に撤兵隊の屯所がある。勝・西郷会談の後、にわかにここが騒がしくなってきた。城が引き渡される前に部隊を脱走させなければ新政府に武器を押収され、解隊されてしまう。いよいよ江戸を脱する時が来たのである。福田は全隊士を集合させた。編成は次の通りである。

第一大隊長、江原素六

第二大隊長、堀岩五郎

第三大隊長、増田直八郎

第四大隊長、戸田嘉十郎

第五大隊長、真野鉉吉

一大隊は約四百人、総勢二千人の大部隊であった。第一から第三までが主力部隊であり、若くて強壮な隊士で構成されている。第四から第五にやや年長の隊士が集められ、撤兵隊の本来の任務である野砲、火薬輸送車の護衛にあたっていた。

撤兵隊と連携する砲兵隊もすでに合流している。

隊長は砲兵頭、天野釣之丞。副隊長は砲兵頭並、間宮鉄太郎。大砲は一座六門、隊士は約七十人。

撤兵隊の幹部の多くは前陸軍総裁小栗忠順の息がかかった者たちであり、すでに福田の下で統制がとれている。それゆえ隊員たちは素六の存在に不信感を抱いていた。勝総裁の人事で配属され、部隊の様子を部外者のように見ているところがあり、まだ少しも隊士らと打ち解けていなかったからである。増田の方は豪放磊落な性格が兵卒に慕われ、それが

「ふり」であったにせよ、すでに隊になじんでいた。二人が頻繁に武総取締の松濤権之丞の元へ足を運んでいることは、ちくいち福田に報告されている。

「砲兵隊の幹部も、江原たちと密に連絡を取り合っておるようです」

表立ってはいないが、下士官の仙石釟三郎が隊内の監察役を勤めていた。

仙石の報告をまとめれば、素六に関しては十中八九、勝総裁から何らかの指示を受けて動いている。それが何なのか今のところ判然としないが、放置しておけば全軍の士気にかかわるだろう。それゆえ〈第一大隊〉という先鋒部隊をあえて素六に割り振ったのだ。血気盛んな若い隊士が選抜されているからで、和平や非戦などを口にすれば、その場で斬られかねない熱気に溢れているからである。

福田は恰幅のいい体に撒兵隊の襞取りマンテル、羅紗で仕立てられた筒袖の陣羽織を着て屯所に現れた。床几に腰を下ろすと、それに従って大隊長の四人と、砲兵隊長天野、義勇隊士常盤之助、会津藩士細川、荒井両名も脇に座した。素六、堀、増田はサーベル拵の刀を嫌ってこれまで通り打刀を差している。隊士は和洋折衷の黒い筒袖段袋を軍服とし、冠物は革製黒塗りの頭巾。装備は前装式ミニエー銃、御貸装具は胴乱や革靴などである。砲兵隊士もほぼ同様であるが、冠物は黒の陣笠であった。

福田は相変わらず大黒天のごとき福相で、それが殺伐とした軍の中にあると、かえって底知れぬ凄みを感じさせる。微笑むように二千人近い兵士たちをすみずみまで見渡した。

「城の引渡しが四月十一日と決まった。されば我が軍は九日から十日にかけて江戸を離れる。霊岸島から海路木更津へ向かうつもりじゃ。船の手配は大河内殿にお任せしておる」

というと、兵たちは鋭い眼差しを常盤之助に向けて、会釈した。皆、緊張した面持ちである。

「ここには誰一人、勝安房守がごとき臆病者はおらぬであろう。主家のために忠をいたさんとする侍しかおらぬと信ずる」

あきらかに、素六や増田を意識している。

「我らは三河武士である。主家存亡のときは身命を賭して戦う。ただそれだけのために代

々禄を賜ってきたのじゃ。我らの大義名分はこれだけである。真野殿、如何か」

第五大隊の真野鉉吉は書院番の父を持つ高禄の子弟で、ここへ配属される前は海軍奉行並支配世話扱の職にあった。撒兵隊では海軍との連絡役も務めている。

疑いもない様子で真野は答えた。

「ごもっともにござります」

「では、戸田殿は如何か」

第四大隊の戸田嘉十郎は佐渡奉行の惣領で、妻は京都町奉行の娘である。

「お説の通りでしょう」

「増田殿は如何」

「三河武士に恥じなき働きを致す所存」と含みをもたせた。

「堀殿は、どうじゃ」

堀は福田の腹心で、砲術奥詰から、素六や増田と同じ砲術教授方に出仕していたこともある。洋学にも通じていたが、剣の腕も立ち、将軍の親衛隊である〈遊撃隊〉の肝煎でもあった。文武両道の士であり、熱烈な佐幕主義者だ。

「申すに及ばず」

「では」と、にわかに福田の福相が厳しくなる。

「江原殿はどう思われる」

素六は憮然としてしばし口をつぐんでいた。そして、

「国際情勢を鑑み、民心を考慮するなら、内戦は避けた方がよいのではありますまいか」

にわかに隊士たちがざわついた。

「先将軍は天朝を尊奉し、居城と領地を差し上げ、ご恭順のお心を徹底されておられる。御宥免あるまで、我らもその至誠に従うべきではござらぬか」

別段、勝総裁の意を体したわけでなく、思うところを述べただけである。この辺りの一本気は父譲りなのかもしれず、増田は密かにため息をもらした。

案の定、堀が激高した。

「我らは祖宗の御恩沢に報いるため、主家と存亡を共にするのだ。うぬがごとき腰抜けは去れ！」

この一言に素六は顔色を変えた。とっさに刀に手を掛けたが、堀はそれよりも一瞬早く鯉口を切っていた。すかさず間に常盤之助が割って入り、双方の顔を睨みつけた。

「お手荒はなさらんでください。大事の前ですよ」

隊士たちの激しい罵声が素六にむけられた。卑怯者！　出ていけ！

素六は軍帽をかぶり直すと、無言のまま屯所から出て行ってしまった。